「鐔・鍔」のこと

著者不明ではあるが、伊賀上野の書肆西沢長兵衛が弘化四（1847）年に刊行した「古今金工便覧（上・下）」（KIT-BN. 8490,91; Acq.1908.02.03）には刀剣小道具としての三所物、目貫、笄、小刀柄、柄頭、櫛、鞘、切羽［狭鍔］、下緒、鞘鞴、に加えて以下の如くに鐔の、歴史的展開ではなく、その義や名称の由来等を開陳されている、即ち「倭名抄に都美波［ツバ］剱鼻也と 今は鍔の字を用ひて都波［ツバ］と読む 鍔の字に剱鼻の義なし 之に誤り来れるにやと軍益考は難じたり 葵鍔というものは葵を四つ合わせたる如くなる形なり 夫木抄六帖題信実朝臣の歌に かつは又さすさやぐちに あふひつは こころありける かな つくり哉 此外にも練鍔楽鍔などいへる名目あれと詳ならず 愛宕山にある尊氏将軍の太刀も練鍔也と云り 練鍔は保元物語又盛衰記にみえ 楽鍔は庭訓往来にみゆ 伊勢家表書に練鍔といふはねり革の鍔なり 祢り革とはいため［撓］革の上にねり物を付てかためたる也 鎧にもねり革を用ゆるなりねり革の鍔といふ事を略してねり鍔といふ也と見ゆ。」引用文に読む倭名抄とは倭名類聚抄の略で、醍醐天皇皇女勤子内親王の命で撰進、源順著、承平年間（931-938）の成立。漢語の意義を分類し、解釈を示し、あわせて音注と万葉仮名和訓を付した辞書（大辞林）。夫木抄は夫木和歌抄の略で延慶3（1310）年頃の編纂、その巻32雑14に藤原信実（1177-1265）の歌が収められている。盛衰記は源平盛衰記の略、作者不詳、鎌倉後期以降の成立で平家物語の異本の一種、一般に流布した平家物語に較べて歴史を精密に再現しようとする傾向が強く、そのために文体に流麗さを欠くが、謡曲や浄瑠璃など後世への影響が多大であった軍記物（大辞林）。庭訓往来は、年間各月の往復消息文を通じて社会生活に必要な数多くの語彙を会得できるようになっている書物。初等教科書賭して広く普及した南北朝から室町前期にかけて成立したとされる作者不詳の往来物。文体は和臭の強い漢文体。いため革は撓革と記し、火であぶり、または膠をうすめた水につけてから槌で叩きしめた牛の革（広辞苑）で、練鍔と同義、従って鐵鍔なる語も可能となる。楽鍔とは楕円形をなす神神餞用のとぎ餅のかたちにその名が由来する（平凡社世界大百科事典、1965）。

鐔―刀剣の刀身と柄との境にはめて手を保護する金具―は今は鍔―刀の柄と刃の間にある環（何れも大修館新漢和辞典、1978）―の字を用いると金工便覧の鐔の項の冒頭に読むが、百科事典等では金工便覧同様鐔の字を以てその見出しとしている。以上古今金工便覧に言う処の関連語彙や固有名詞に就て、我々の知識を明確にすべく、蛇足とは承知の上で説明を加えてみた。本稿が目する処はこれらを踏まえて、我が美術工芸資料館が蔵する鍔コレクションの紹介である。

我々の資料館には合計69点による鍔［受け入れ当時の標本台帳は此の文字を充てている］コレクションを蔵しているが、これらの個々に就ての調査・研究は大略未着手のままである。筬、陣笠、軍用馬面、軍扇、太刀、鏑矢、具足その他は受け入れ時に武器（AR-）として分類されていたのに対して鍔は金工品（OM-）或いは彫刻（OS-）に分類・登録されていたのである。鍔の購入・受け入れを発意したのが誰であったかは全く明らかではないが、その蒐集意図が強く反映したものと考えられる。以下コレクションの受け入れ概略を示すこととする：

AN.803（OM-15）	鉄鍔	谷口冶三郎ヨリ購入	Acq. 1903.02.23.	14ps	￥5.50
AN.806（OM-16）	鉄鍔	河村文次郎ヨリ購入	Acq. 1903.03.09.	23ps	￥18.40
AN.807（OS-1）	金造り鍔	河村文次郎ヨリ購入	Acq. 1903.03.09.	2ps	￥15.60
AN.811（OM-18）	鉄鍔	西村松次郎ヨリ購入	Acq. 1903.03.13.	17ps	￥6.80
AN.823（OM-19）	鉄鍔	櫻井忠剛ヨリ購入	Acq. 1903.04.20.	6ps	￥1.80
AN.1764（OS-11）	竹ニ梅鍔（烏金）	鶴末義松ヨリ購入	Acq. 1916.02.05.	1p	￥150.00
AN.1765（OS-12）	和銅開珍鍔（鉄）	鶴末義松ヨリ購入	Acq. 1916.02.05.	1p	￥75.00
AN.1766（OS-13）	馬面透鍔（鉄）	鶴末義松ヨリ購入	Acq. 1916.02.05.	1p	￥55.00
AN.1767（OS-14）	虎ニ人物鍔（鉄）	鶴末義松ヨリ購入	Acq. 1916.02.05.	1p	￥45.00
AN.1768（OS-15）	山水象嵌入鍔（鉄）	鶴末義松ヨリ購入	Acq. 1916.02.05.	2ps	￥42.50
AN.1769（OS-16）	猿猴ニ月鍔（宜徳）	鶴末義松ヨリ購入	Acq. 1916.02.05.	1p	￥7.50

○

明治9（1876）年に廃刀令が出された後は太刀は固より鍔を含む装剱金具の一切が無用となったのは理の当然である。従ってそれらが廃毀される運命にあったのは言うまでもない。それら廃毀されたものの中でも秀逸とされる［古］鍔を集めてパリのルーヴル博物館に寄贈した者がいたが、それは炯眼の賜物の結果であろう。寄贈に際しそれらに添えた説明文（Catalogue de la collection des gardes de sabre Japonaises au Musée du Louvre, Paris. 1904.（*sic*））は、就中外国人が無銘の古鍔を鑑定する指針とはなったが、林忠正の解説内容は全く信頼に及ぶものではないと、安達仁道は憤慨している（「本邦装剱金工略誌」審美書院刊、1913-BN.4216（Acq.1913.9.22）-, p.9）。「…刀を廃せよとの御のり下りてより、わがどちこれを腰にせざれども、此御國にて製造せる刀剱はいともするどく、…上下おしなべてこれを護身の寶とする…。…時勢の治乱興廃というものに伴われて、此道々のわざ人の作品精粗なきこと能わず、或は骨をたふとび、鋭をむねとし、或は花やかに其にほひをよろこびなど、…特に装剱のわざに、えもいひ難き一種の趣致を身出て、寶にこの時代の美術の一部分をしめたりと、いはゞいはんとする味わい加わりぬ。…」聊か長い引用ではあるが、失われ行く装剱の美の世界への哀惜を綴ったのは国学者小杉榲邨（1834-1910）である（八木冨冶著、東京・松山堂書店刊「鏨廼花」1904-BN.5061（Acq.1920.12.22）-. 跋文より）。そして「…古来大和民族鏨の長技は以て世界禰讃措かざる所、日本武士道の形而上の精華は之に蒐って還た一種の美術となれるもの。…其の精華を味ふの意味に於て之が発行を迫るもの…」と、松山堂主人は識すのである。

竹ニ梅鍔（烏金）〈表面〉（AN.1764）
後藤法橋一乗（1790-1876）作
73×78m/m 厚 5m/m 97gr.

殺傷の武器に具えられる装剱金具であれば、その鋭利なるを以て用に適うとするものであろうが、それを意匠の領域或いは工芸という美の世界へと昇華させた武人の魂と、そして刀工の技藝によって成った器具にこそ、今、我々は目を向けなければならないのであろう。

（美術工芸資料館 教授 竹内次男、
美術工芸資料館 技術補佐員 松原潔；2007.2.28）